

## 万葉集歌碑訪問

## 茨城県鹿島神宮

平成二十四年六月十五日 台風四号の直前の快晴の日

この歌碑の歌は大舎人部千文が詠んだ歌です。千文の歌は二首が万葉集に収録されています。第二首目の歌がこの歌碑に刻まれています。

## ☆巻二十・四三六九

筑波領のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹そ昼も愛しけ

▽都久波孫乃 佐由流能波奈能 由等許尔母 可奈之家伊母曾 比留毛可奈之祁

## ☆巻二十一・四二七〇

霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍にわれは来にしを

右の二首は、那賀郡の上丁大舎人部千文

阿良例布理 可志麻能可美乎 伊能利都々 須采良美久佐奈 和例波伎尔之乎

右首 那賀郡上丁大舎人部千文

千文という若者は那賀郡出身で、上丁で大舎人部に属していました。今の那珂地方の人物で、防人となつて筑紫に赴く時に鹿島神宮に参つたのです。第一首目の歌から妻がいたことが分かります。

〔筑波山の百合のような妻の寝床もおもしろいが、(別れてきたので)昼もいとしい〕  
詠んでいます。千文は天皇のために家族と別れて防人となった覚悟を示しています。子供のことや、父母のことが詠み込まれていないので、若い夫婦だったのでしょう。



## 防人の歴史

防人は天智天皇三年（六六四）に西海防衛のために創設されました。新羅征討軍が白村江の海戦で唐・新羅連合軍に惨敗し、退却後に国内の防衛網の構築の一つです。防人と言えば、東国から派遣されていたようです。

持統天皇三年（六八九）一月に筑紫の防人の年限が六年から三年に短縮されています。更に万葉歌人の大伴旅人が大宰帥の時の、天平二年（七三〇）に関東から大宰府に贈る防人が停止されています。この年の十二月に大伴旅人は大納言に任じられて、帰京するのですが、大宰帥として最後の大英断でした。

天平九年（七三七）八月に、平城京は種痘が大流行し、名門中の名門の藤原家の四兄弟が病死する惨状を呈しました。筑紫もその前年には流行していたのですが、この年の同月に筑紫に派遣されていた防人たちは出身国に帰還が赦され、代わって筑紫の人が老岐・対馬を防衛させる布告が出ています。

こうした悲惨な状況のせいもあったのでしょう。大宰少弐（大宰府第三等官）の藤原広嗣が筑紫で反乱を起こします。中央から鎮圧軍が派遣され、間もなく鎮圧されるのですが、大宰府は廃止されました。五年後の天平十七年（七四五）六月に復活しましたが、防人制度も復活したようです。

天平二十年四月に太上元正天皇が崩御され、天平感宝と改元されますが、その年の七月に聖武天皇は、皇太子であった阿倍内親王に譲位され、更に天平勝宝に改元されます。その四年（七五二）四月に東大寺の盧舎那仏の開眼供養が大々的に行われました。先の千文が歌を詠んだのは、それから三年後のことです。「**天平勝宝七歳乙未の二月に、相替りて筑紫に遣はさえし諸国の防人等の歌**」として十カ国から総数百七十四首もの防人の歌が進上されたのですが、選別されて九十五首が万葉集に収録されました。これらの歌は、万葉集の歌人で、万葉集を編纂し完成させた大伴家持が、天平勝宝七歳（年に同じ（七五五））に兵部少輔（兵部省第三等官）の時に、東国十カ国に命じて【？】防人の歌を集めさせ、進上されてきた歌を選別して万葉集に収録したのです。

## 常陸国の防人の歌

常陸国に限れば、この時の常陸守は百済王敬福と想定されます。天平勝宝四年（七五二）に常陸守に任じられ、離任したのは聖武上皇が崩御されて改元された天平宝字元年（七五七）七月に出雲守に転出していますのでそう推定しています。ところが、この時の百済王敬福は従三位でした。この百済王敬福も数奇な運命をたどりまし。天平勝宝元年（七四九）四月に、陸奥守の時に、当国で発見された黄金を朝廷に献上し、そのことによって盧舎那仏が完成したと言われていることを裏付けるように、献上と同時に従五位上から五階級特進の従三位を叙位されています。従三位の常陸守ですから、歌を収集するのは部下に任されたのでしょうか。部領防人使・大目（常陸国四等官）の息長（真人）国嶋が担当したことになります。進上した十七首のうち十首が採用され、その中に千文の歌は二首も選ばれたのです。防人は、防衛のための軍事訓練だけでなく、文化的な教育も受けていました。倭歌を詠むこともその一つでした。万葉仮名で表記する知識を身に付けていたのです。万葉集の第十四巻は「東歌・防人の歌」ですから、東国の文化向上に防人たちが果たした貢献は大きかったはずです。

